九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

初期女性開放論にみる恋愛結婚への志向と提唱

野本, 泰子
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/16015

出版情報：Comparatio. 5, pp.15-23, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

初期女性開放論にみる恋愛結婚への志向と提唱

野本　泰子

はじめに

本稿は、恋愛が女性開放論にどのように現れ、また女性開放論にどのように関与してきたかを、恋愛と結婚の統一、すなわち、恋愛結婚への志向と提唱として辿るものである。検討の対象とする女性開放論を本稿の目的に有効と考えられる二つのグループに絞った。一つは、日本への恋愛導入期における女性解放論者である巌本善治と、恋愛を説いた北村透谷である。第二のグループとしては、『青鞜』の論者達である。では、このような試みをなぜするのかという問いに対しては、恋愛を分析概念として用いるために必要な手順だからということがその答えである。今後、今日のジェンダーの問題に及ぼす恋愛の作用を分析するに先立って、ここで、女性開放論と恋愛の関係をみておきたいと思うのである。そしてまた、この試みをすることによって恋愛の特質を詳しく知ることが出来ると考えるのである。佐伯順子は恋愛のルーツを文学作品によって辿っている(注1)。本稿の場合は、分析の対象を女性開放論に求めたこと、および、恋愛と結婚の統一という形で恋愛結婚のルーツを辿る点において佐伯順子の試みと異なる。佐伯順子は分析の意図について「こうした価値観そのものが日本人の心性の中に生じた過程を明らかにしなければ、日本文学、日本文化を論じることは不可能であろう。」(注2)と述べているが、佐伯と本稿とでは、あることを理解し解明するために前提となる事柄を、其の起源に遡って先ず調べてみようと言う点で共通する。ただ、本稿の場合は分析の目的としてジェンダーの問題が想定されている点が異なる。ここでその想定されているテーマについて先走って述べることは本稿のテーマからは外れるかもしれないが、本稿での筆者の関心にも関係するので、簡単に述べることにする。

本稿のテーマである、恋愛と結婚の統一は、筆者の将来のテーマの2点に関係する。一つは、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーであり、他の一つは良妻賢母思想である。少し説明を加えると、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーとは、「(婚姻において愛と性が一致する)ことが唯一の正しい性行動である」(注3)と説く性規範である。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、女性の家庭生活への隷属をもたらす(注4)点で、フェミニズムの批判の対象とされる事柄である。同じく、良妻賢母思想も女性を妻・母という性別役割分担に限定するものとして問題視される(注5)。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーの検討と良妻賢母思想の検討に当たっては、恋愛あるいは恋愛結婚が重要な鍵になると考えられる。果たして、恋愛はジェンダーの諸問題を検討する際の分析概念になり得るのだろうか。このことを本稿で検討したい。

第1章　巌本善治と北村透谷にみる恋愛結婚への志向

この章では、日本における恋愛結婚の起源に光を当てる。それは、恋愛の移入当初において恋愛という言葉の普及に貢献したと思われる北村透谷と、恋愛の移入と時を同じくして初期女性開放論を説いた巌本善治を検討することである。両者において、恋愛と結婚の統一がどのように志向されたかをみていくことにする。

(1)　北村透谷

北村透谷が特筆すべき女性解放論者の一人であったわけではないが、恋愛概念の導入期における彼の恋愛についての記述は恋愛の形成に影響力を持ったと思われる。そして彼は恋愛と結婚についても説いている。まず北村透谷の恋愛観を一瞥しておこう。透谷の恋愛観は「厭世詩家と女性」(注6)の冒頭の言葉である「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、」(注7)と

いう言葉に集約されていると言ってよいだろう。北村透谷は巌本善治が経営当事者である明治女学校の教師であり、巌本善治が編集人となっている『女学雑誌』の論者でもある。両者は共にキリスト者でもあった。従って、恋愛の移入当初にキリスト者である北村透谷と巌本善治によって恋愛が説かれ、考えられたということは、恋愛の概念にキリスト教の影響が窺われる。透谷は「厭世詩家と女性」および〈「伽羅枕」および「新葉末集」〉で恋愛について述べている(注8)。透谷によると、恋愛は「人類の霊生の美妙を発暢すべき者」であり「造化の花」と称される(注9)。透谷の恋愛観にみられる恋愛讃美は霊生を重んじると共に「処女の純潔を尊とむ」(注10)ものでもあった。このような恋愛観は、西欧的・キリスト教的特色を備えていると考えられる。透谷が「厭世詩家と女性」で想定している厭世詩家とは、ゲーテ、バイロン、シエリー等の西欧の詩人達である。透谷は文中のいたるところでこれら西欧の詩人からのイメージを援用している。例えば、バイロンを援用して、恋愛について「微妙なる音楽の境を越えて廣がる」(注11)ものといい、また、ゲーテを援用して、「純潔なる寶玉なり」(注12)等と描写している。これら西欧の詩人達を援用することによってイメージを膨らませ、日本の恋愛の概念に何らかの影響を与えたと考えられる(注13)。

次に本稿のテーマである恋愛と結婚の関係を透谷にみることにするが、透谷ではそれがどのように捉えられていたのであろうか。「厭世詩家と女性」では、厭世詩家の場合と常人の場合では異なることが述べられている。厭世詩家の場合は恋愛と結婚は両立し難いという。「婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易」であり、「婚姻の歓楽は彼等を誠信と楽天に導くには力足らぬ」ものである。何故ならば、一つとして「厭世家は恋愛に対すること常人よりも激切なる」故である。さらにまた、「女性は感情的の動物」で「甚だ偏狭頑迷なる者」であり、「男性の愛情の為に左右せらるる者」であるが、「女性を冷罵する事、東西厭世家の常」であるから。そのため「始に過重なる希望を以て入りたる婚姻は、後に比較的の失望を招かし、惨として夫婦相對するが如き事起」るのである。一方常人においては「男女相愛して後始めて社会の真相を知」り、「婚姻の人を俗化するは人を真面目ならしむる所以」である。「厭世詩家と女性」では恋愛は「狂愛」と「静愛」の二種類に分けられる。「狂愛」は厭世詩家の「常人よりも激切なる」恋愛である。この透谷の恋愛の分類はアンソニー・ギデンズによる「ロマンティック・ラヴ」と「情熱的恋愛」という二つの分類を想起させる。ギデンスにおける「情熱的恋愛」は、熱狂的で「破壊的な力を有してい」て、「社会秩序と社会的義務の観点から見た場合、…中略…危険を有している」ものである(注14)。厭世詩家の「狂愛」のイメージはギデンスの「情熱的恋愛」に重なる。透谷における「静愛」と「狂愛」という対比、および「常人」と「厭世詩家」という対比において、「狂愛」は「厭世詩家」に結びつくが、論の中心が恋愛讃美にあって、恋愛が必ずしも結婚に結び付けられていないこと、および、「婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なり」との行を考え合わせると、透谷の恋愛論は恋愛結婚への積極的な志向とは言えない。只「常人」においては、「婚姻は人を俗化する」ものであるけれど、「人を真面目ならしむる」ものであるから、婚姻は否定されていない。そこで思い起こされるのは、透谷の恋愛論は女性開放論とはいえないということである。それは透谷自身が特筆すべき女性解放論者ではないことの当然の帰結であろう。そこで一つの予想が成り立つ。「恋愛結婚への志向は女性解放論者によって積極的に語られるのではないか」という予想である。この予想と合致する主旨のことを張競が述べている。「恋愛が女性の権利と結び付けられ、恋愛の自由を求めるのが婦人運動の一部分とされたのが近代中国の注目すべき特徴であった。」(注15)と張競は恋愛と婦人運動の関連性の存在について述べている。日本の明治初期の女性開放論を思い起こすと、機関誌『明六雑誌』によって、欧米の女性解放思想が紹介され、そこで男女平等論を説いた森有礼、福沢諭吉においては一夫一婦制の提唱として結婚は考えられていたが、彼等においては恋愛はまだ十分にその視野に入っていなかった。女性開放論が恋愛と共に語られるのは巌本善治の『女学雑誌』になってである。

(2) 巌本善治

恋愛結婚への志向の萌芽は、まず、巌本善治と『女学雑誌』に認められる。ここでは最初に、女性解放論者としての巌本善治の主張をみるために、彼の「女子教育」に触れる。そして次に、その彼が恋愛結婚への志

向をどのように示し、説いたかを検討する。巌本善治は『女学雑誌』とその母胎となった『女学新誌』においてキリスト教に基づいた女性開放論を展開した。又彼は、明治女学校の教頭、校長として女子教育の実践に携わったのであるが、同校の教師には、北村透谷・島崎藤村・戸川秋骨・平田禿木・三宅花圃らがいる。『女学新誌』の発行は明治17年6月15日であり、『女学雑誌』の創刊は同18年7月20日で、終刊は同37年2月15日発行の第526号である。北村透谷が「厭世詩家と女性」を発表したのは明治25年2月6日と2月20日の『女学雑誌』においてであった。巌本善治の教育思想は「キリスト教的、近代的、良妻賢母主義」として捉えられる(注16)。巌本善治の「女子教育」は、彼の「女学」の一部として位置づけられているのであるが、巌本は「女学」について「女学の解」で次のように述べている。

> 女学は、即ち、「婦女子に関する一科の学問」と云へること也。之を言ひ換ゆれば、其の心身に付て、其過去に付て、其将来に付て、其の権理、地位に付て、および其の現今に必要する雑多の事物に付て、凡そ女性に関係する凡百の道理を研窮する所の学問なり(注17)。

巌本のこの見解が示すように、『女学雑誌』が取り上げる問題も広く社会問題にわたっている。その彼の〈広範な「女学」の活動の中で、最も重要な中心的活動となったことは〉(注18) 女子教育の事業であった。巌本の初期女子教育思想は『女学雑誌』第2・3・5号における「婦人の地位　上・中・下」と『女学雑誌』の母胎となった『女学新誌』の中にみることができる。それらは、男女同等非同権論、男女異質論、職分論、としてまとめることが出来る。そして、巌本の女学思想は明治25年3月29日に発刊された冊子『吾党之女子教育』において其の頂点を示し、以後は変貌していく(注19)。

次に巌本善治における恋愛結婚への志向の跡を見よう。まず巌本善治の、恋愛と結婚に関する初期の記述は、『女学新誌』に見出される。『女学新誌』第20、21、22号(明治18年4月10日～同5月10日)に連載された「夫婦の愛」では「婚姻は真正の愛情のある男女のあいだにのみ結ばるべきこと」が述べられている。また、恋愛という概念が日本に流入したのは明治20年代とされるが、それ以前に書かれた「婦人の地位　上・中・下」にも十分とは言えないが封建的・儒教的な枠を越えた夫婦の愛が述べられている。「婦人の地位　中」には「開花の時代」の「男女の交情」は「ただ愛心を以て互ひに交はるべき」(「婦人の地位」の旧字体は一部新字体に変えた　筆者注)であるとあり、「婦人の地位　下」では次のようになっている。

> 抑も婦人は如何なる有様に在らんこと至当にして且つ之を如何様に取扱ふを以て当然とすべきや吾人思ふに夫は妻を愛すべし妻は夫を敬すべし夫は外を理むべし妻は内を守るべし夫妻は天権を均ふして而も世にありては妻たるもの夫の保護を受けて之に副ふべし是れ適当の事ならむと

この文に窺われるように、「婦人の地位」では『女学新誌』からの巌本善治の主張である男女同等非同権論・男女異質論・職分論が引き続き述べられている。男女異質論と職分論として「その身体の造構よりして考ふるときは到底かゝる相違を来すべしと云うふこと定論なり…(注20) 社会の上より云ふも女は保守し男は進取すること尤も利益多し」(注21) という箇所があるが、このような語句が示すようにこの時期の巌本善治の主張は新旧混淆であったことが窺える。また、「此の両方ありてこそ過ぐるなく及ばざるなくよく中庸を得て真正の進歩を為すことならん」(注22) と説く部分に巌本善治の中正主義という特色を指摘できる。それは、「裏は表に副ひ内は外に従ふの理に由りて女は男に従ふべき事となるなり」(注22) という語句に顕れているように、合理的な説明に欠けているものと言えよう。さらに、「斯ありてこそ一家は平和に治まり家内は親睦に交はり此世に在らん限り[ハッピー、ホーム](幸なる家族)を得て楽み極まりなかるべき也」(注22) と考えるに至っては、女性開放論としては楽天的に過ぎるだろう。いくつか指摘できるように、巌本善治の初期の主張は女性開放論としては不十分な新旧混淆するものであった。しかし、そこには、恋愛結婚への志向の萌芽が認められるものでもあっ

た。

巌本善治のそれまでの女学思想の論説文を選んで編集した『吾党之女子教育』は明治25年に発刊された。ここには巌本善治の女性開放論の到達点が示されていることについては既にふれたが、その到達点は初期の男女異質論と職分論を大巾に書き換えたところに位置する。それらは、彼の「自由開発論」、女性観、「母妻論」としてみられる。「自由開発論」は『吾党之女子教育』の第一章にあり、その中で彼は「先天的に考ふれば男女別異の最極点は一は子を産み他は産まざるの一点のみ、故に産児よりして来る身理上社会上の影響は実に女性が男性に異なりて所有する所の結果なるべし、… 而して此の異分の如何なるものなりやは、之を後天的に研究せざる可らず」と述べるに至っているが、社会上の影響によって後天的につくられる性という考え方は、今日のジェンダーの概念と通底するものである。「母妻論」は第4章にあるが、巌本善治は「婚姻何ぞ必ずしも人々の挙て負担すべき責任ならんや、… 女性の惣ては決して皆な婚姻すべきものにあらざる也」と述べている。「すべての女性は、結婚しなければならないものだろうか」という問いは、女性に多様な生き方を認めることに繋がるフェミニズムの主張であるが、巌本善治における初期の職分論を一新する考え方である。しかし、巌本善治が今日のフェミニズムと同じ段階に到達しているわけではなかった。従って、彼自身に生じる矛盾である、「男女別異の最極点は一は子を産み他は産まざるの一点のみ」と「女性の惣ては決して皆な婚姻すべきものにあらざる也」の間に生じる矛盾を彼は次のように克服している。

> 婚姻は女子一生の大目的なれども、女子の大目的は尚ほ其他にもあるなり … 余は女子を婚姻の為に教育せず然れども母妻たらしむことを以て其天性を開発すると思へり、而して母妻はたゞ一家一人の母妻のみと限ることなし、其人の才量如何にしたがひ、或は一人の母妻となり、或は一国満天下の母妻たれと云う、(第1章)

さらに、『吾党之女子教育』の第12章に理想の賢婦人像とその内助が述べられている。野辺地清江の要約によってその内容を示すと、「理想夫人の最大要務は、世界唯一人の男性として夫と理想をともにし、真実の愛をもって、他の何人もなしえぬほど、深く夫を愛することである。そしてその愛は、肉の愛ではなく、霊の愛であり、夫をして、義なる・聖なる・美しき人物となす愛である」(注23)とある。同様の愛と内助が巌本善治と妻かし子の間にあったものと思われる。かし子が新郎巌本善治に送ったとされる「花嫁のベール」(注24)という英詩は女性の個としての自覚を表す恋愛宣言となっている。その格調高い恋愛を唱った詩の一部を訳詩によって紹介する。

> われら結婚せりとひとは云う　またきみはわれを得たりと思う
> 然らば　この白きベールをとりて　とくとわれを見給え
> 見給え　きみを悩ます問題を　またきみを歎かす事柄を
> 見給え　きみを怪しむ疑い心を　またきみを信ずる信頼を
> 見給う如く　われはただ　ありふれし土　ありふれし露なるのみ
> われを薔薇に　造形せんとて　疲れて悔い給うなよ

ありのままを見て欲しいという花嫁の要求は、近代的な恋愛観のあらわれとみることができる。この英詩は『女学雑誌』第172号(明治22年7月27日)に載せられたものである。巌本善治の女性開放論の展開、上昇の途上でつくられたことになる。巌本善治とかし子の結婚は恋愛と結婚の統一の一例とみることができる。恋愛結婚への志向の萌芽は「花嫁のベール」という詩において近代的な恋愛宣言となって花開いている。そして巌本善治が到達した女性開放論の一部は、『青鞜』の論者たちに受け継がれる。

第2章　「貞操論争」と「母性保護論争」にみる恋愛結婚の提唱

巌本善治の女性開放論の流れを部分的に継承し、それをさらに推し進めて女性解放の流れを大きく変えようとしたのは『青鞜』の論者たちであった。巌本善治と『青鞜』に共通して流れる水脈は次の三ヶ所である。1　女性に多様な生き方を可能にする「結婚が女の唯一の生きる道ではない」との主張。 2　男女の一点における性のちがいを認めるが、女性の可能性に信頼を持つこと。 3　恋愛結婚への志向を示し、提唱したこと、である。それらの共通点を具体的にあたってみると、1　は平塚らいてうの主張にみつけることが出来る。らいてうは「何故世の多くの女性たちには女は一度は必ず結婚すべきものだということに、結婚が女の唯一つの生きる道だということに、すべての女は良妻たり、賢母たるべきものだということに、これが女の生活のすべてであるということにもっと根本的な疑問が起こって来ないのでしょう。」(注25) と疑問を投げかけている。また、2　の女性の可能性に寄せる期待は、巌本善治では『吾党之女子教育』の第2章の「抑そも女性の心中には未だ発見せられざる無尽蔵の宝庫あるべし」という語句に明確に表されているが、『青鞜』における同様の文脈は、まず、『青鞜』発刊の辞に見つけることが出来る。「元始、女性は實に太陽であった。」という発刊の辞冒頭の言葉に始まり、「只私共の内なる潜める天才を信ずることによって、天才に對する不斷の叫聲と、渇望と、最終の本能とによって、祈祷に熱中し、精神を集注し以て我を忘れるより外道はない。」(注26) という宗教的色彩を帯びたらいてうの言葉によって表現されている。 3　については、『青鞜』のいたるところで恋愛と結婚が論じられ、『青鞜』の各論争の中に恋愛結婚への志向と提唱がみられる。『青鞜』の主要な論争は、「貞操論争」・「堕胎論争」・「廃娼論争」であるが、本稿では、恋愛結婚への提唱が最も多くみられる「貞操論争」を取り上げる。それに加えて、『青鞜』後に起こった「母性保護論争」についても本稿のテーマによって検討を加える。

(1)「貞操論争」

「貞操論争」は、大正3年から4年にかけて、『青鞜』の同人である生田花世と原田皐月の間に始められた。その後、多くの論者を加えて『青鞜』その他で論じられるのであるが、まず、その発端は、生田花世の体験的な内容を述べた「食べることと貞操と」(注27) という文であった。そこで生田花世はパンのために貞操を捨てることも止むおえないことがあると述べた。それに対して原田皐月は、「生きる事と貞操と―反響9月号『食べる事と貞操と』を読んで」(注28) によって、貞操は「女の全部」であると反撃した。両者の主張には恋愛と結婚が見え隠れする。両論者の主張の相違は異なる恋愛観と人生観の顕れでもあった。しかし、共に貞操観を語ることは恋愛観を語ることに繋がった。しかも、結婚に結びつく恋愛が語られたのである。その様子をまず両論者においてみることにしたいと思うが、まず、生田花世に恋愛と結婚の統一を述べた文が多く見出される。生田花世によって恋愛と結婚はどのように語られるかを次の引用に見よう。

> 愛するものの為にこそ私はかつて自分の処女を捨てた。然し今私を愛する私の夫は私がかつて愛するもののために私の持てるすべてを捨てて愛したと云う事の苦悶と涙の心とに逢着して私を見出しし私を愛し、相愛して結婚をしてゐるではありませんか。
>
> (「周囲を愛することと童貞の価値と―青鞜12月号安田皐月様の非難について」)(注29)

> 私はこの男を愛してゐる。この身も心もあげてこの夫を愛してゐる。互いに所有し所有せられて生きてゐるのです。(同上)(注30)

> 有夫の女が密かに他の者に淫を得る時、その時はもうその女とその女の夫との間に愛はなく、従ってたとへその外形に夫婦の体裁を持ってゐようとも、その二人の関係は決して夫婦ではないではありませんか、　(同上)(注30)

ここでは　結婚＝夫への愛＝相愛　を述べることによって、結婚と愛が統一されている。そしてこの愛は、苦悶と涙を理解することによって逢着する愛であり、身も心もあげて愛する愛である。それが生田の恋愛観である。同じく、安田の恋愛観も彼女の貞操論に窺えるのであるが、「生きる道は一直線だ。」(注31) という言葉は彼女の人生観をもよく表している。

平塚らいてうの主張には他の論者に比べてより明確に恋愛結婚の提唱がみられる。しかも「貞操論争」に限らず、「廃娼論争」、「堕胎論争」での主張においてもである。らいてうは「貞操論争」に加わった文で次のように恋愛結婚を提唱している。

> 今日一般に行はれる愛によらざる形式結婚が速に打破せられ、真の意味に於ける処女破棄の最も適当なる時が即ち真正の結婚である日のやがて来らんことを私は切に望んでゐる。
>
> (「処女の真価」) (注32)

> 新道徳が結婚の中心を恋愛に置き、恋愛生活によって、相互の人格の完成と種族の改善とを計るのを目的として居ることは既に申しました。
>
> (「差別的性道徳について」) (注33)

もっとも、らいてうは形式的な結婚制度を否定していたので、らいてうにおける結婚を説明する必要があるだろう。らいてうは結婚について「私どもはたとえ結婚そのものに反対しないまでも、今日の結婚という観念、並びに現行の結婚制度には全然服することが出来ないのでございます」(「世の婦人のために」) (注34) と述べ、らいてうにとって結婚とは恋愛のある男女が一つ家に住むということほど当然のことはなく、ふたりの間にさえ極められてあれば形式的な結婚などはどうでもかまわないという。

「廃娼論争」におけるらいてうの恋愛結婚の提唱としては、「夫婦関係は必ず恋愛関係でなければならぬ、そこに真の一夫一婦が成立するといふ考えから、」(「矢島楫子氏と婦人矯風会のの事業を論す」) (注35) がある。「堕胎論争」においても、「高き恋愛によって結ばれた…男女の自制心は、自然彼等の間の産児数を適当に制限する」(「避妊の可否を論ず」) (注36) と述べて、恋愛がらいてうの各論争の主張とその核心で重要な役割をなすものであることを示している。後にらいてうが母性重視の思想に傾く主張においても、「私は信じます。この世界の禍を幸福に転ずるものは、… 恋愛及び母性でなければならぬ、と。」(「社会改造に対する婦人の使命」) (注37) と、恋愛を重視していることに変わりない。以上、らいてうの各主張が恋愛と結びついている様子を確認した。さらに、らいてうにおいては現行の結婚制度ではないにしても、恋愛により結ばれる結婚が明確に提唱されているとみることが出来る。

与謝野晶子の「貞操論争」での発言は、直截な言い方ではないけれど恋愛結婚の提唱と受け取れるものである。晶子は「貞操に就いて」で、「其の愛の契約をば相手が破るやうな不純な行為をしたら、放棄して差支へないと思ひます。… 女は自分のために自分が貞操を持つと同時に、相手の男にも貞操を守らせることは、妻たるものの義務だと思ひます。」(注38) と述べている。

その他、『青鞜』に属さない女性解放論者達の「貞操論争」においても、恋愛結婚への志向と提唱が認められる。それを二つ引用する。

> 我々の夫婦関係といふものは、其の根本を愛におかなければならないが
>
> (松本悟郎 「貞操は道徳にあらず」) (注39)

> 婦人矯風会が多年称へ来った一夫一婦の制は実にこの根本真理に立つものです。一人の男子と、

一人の女子が互ひに対し、互ひに愛して始めてここに神聖なる恋愛が生じます。

（久布白落実「貞操の観念と国家の将来」）(注40)

このように「貞操論争」は『青鞜』の同人に限らず、広く女性解放論者によって論じられたのであるが、そこでも恋愛と恋愛結婚が志向され提唱された。

(2)「母性保護論争」

最後に、「母性保護論争」に顕れた恋愛結婚の提唱について簡単に述べたい。「母性保護論争」は女性の経済的な独立と母性についての論争であったが、1918年から1919年に亘って論じられた。主要な論者として、与謝野晶子、平塚らいてう、山川菊栄、山田わか、がいた。晶子とらいてうは共に、女性の経済的独立の重要さを認めながらも、母性保護の可否については意見を異にした。らいてうは、妊娠時にある女性に国家の経済上の保護を要求したが、晶子は、「婦人は如何なる場合にも依頼主義を採ってはならない」(注41)と主張した。両者の主張では共に恋愛結婚が提唱されている。晶子は「母性保護論争」の発端となる「女子の徹底した独立」の中で、「男女相互の経済上の独立を顧慮しない恋愛結婚は不備な結婚であって今後の結婚の理想とすることが出来ません。」(注41)と述べて、理想的な結婚は「経済的に独立」した「恋愛結婚」であることを示している。同趣旨の主張が「婦人と労働」で「然るに女子に労働の実力があれば、完全に独身生活も出来、急いで寄生的奴隷的な無恋愛結婚を求める必要も起こらず、人格的に信頼し合った恋愛を〈夫婦共稼ぎ〉と云う物質的条件に由って支持される真実の理想的結婚の中に完成する事も初めて可能になります。」(注42)と述べられている。

一方、らいてうの主張の骨子は母性保護による経済的独立にあるが、らいてうは「母性保護はまた恋愛結婚の理想を完全に実現しうる道だ」(「母性保護問題に就いて再び与謝野晶子氏に寄す」)(注43)と主張する。晶子・らいてうの両氏は一部の論点において異なっていても、理想的な結婚は経済的に独立した恋愛結婚であることにおいて一致する。恋愛結婚、或いは恋愛は女性の問題と密接に結びついていると考えられる。

「母性保護論争」の主要な論者の一人である山田わかにおいては、恋愛結婚の提唱は、「私が、家庭を最も進歩した婦人運動の出立点とした理由は、性欲の奴隷より解放され、教育された本能を基礎とした神聖なる恋愛の上になり立った夫妻を造り、生活の権利を徹底的に自覚した家庭を造るにあるのです。」(「婦人を惑はす婦人論」)(注44)という語句によって示されている。

以上、恋愛結婚の提唱というテーマを女性解放論者の様々な主張と論争を通して検討し、その結果、多くの論者において、その主張は異なっていても、女性の解放と恋愛結婚が共に語られることをみることができた。女性の解放の問題を考察するに当たっては、恋愛は重要な要素であると考えられる。

おわりに

本稿での検討によって明らかになったことをまとめてみると次のようになるだろう。

第1章においては巌本善治の女性解放論にあらわれた恋愛結婚への志向を追った。そして、巌本善治の女性解放論の展開と共に恋愛結婚への志向がなされ共に変化する様子をとらえた。彼の「女学思想」の頂点においては、恋愛結婚への志向と共に、初期の新旧混淆であった女性観は、より女性の解放の方向に向けて、また女性の可能性を信じる方向へ向かった。そして、この恋愛結婚と共に説かれる巌本善治の女性解放論の変遷を見ることによって、恋愛に付与されていったであろう特質をも知ることが出来るのである。巌本善治の女子教育論はキリスト教的・西欧的・近代的な良妻賢母論と言われるが(注45)、それは「同等・異質・職分論」と要約された。特に性別役割分担というジェンダーの問題に結びつく職分論が、恋愛結婚への志向と共に説か

れたことは、恋愛が性別役割分担のテーマの分析には欠かせない分析概念であることを示している。又、恋愛の導入の初期における北村透谷の恋愛についての文章は、導入期における恋愛のとらえ方を知る上で重要と考えられるが、透谷の恋愛のとらえ方それ自身が、いまだ移入され萌芽とも言える形成途上にあった恋愛の概念に新たなイメージを付与していったことが考えられる。北村透谷によって、恋愛は「人生の秘鑰」として語られ、讃美された。

第2章においては、女性の解放にとって重要な役割を果たした『青鞜』の論者達を中心とする論争の中に恋愛結婚への提唱が共に織り込まれ、しかも、各論者の主張を支える重要な軸となっていたことをみた。このことは、以後それらの論争の意義が高まるにつれて、恋愛結婚の成立を促す作用ともなったと考えられる。恋愛は女性の解放と緊密に結びつき、今後ジェンダーの問題を検討するに当たっては重要な分析概念になると考えられる。そして、今日のジェンダーの問題を考えるに当たっては、恋愛および恋愛結婚との関係において考察する必要があるだろう。

注

1　佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』、岩波書店、1998年1月。および、『恋愛の起源』、日本経済新聞社、2000年2月。
2　前掲『「色」と「愛」の比較文化史』4頁。
3　吉澤夏子「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤」『近代日本文化論 8 女の文化』、岩波書店 2000年2月、205頁。
4　アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』松尾精文・松川昭子訳、而立書房、1995年7月、96頁参照。
5　牟田和恵〈「良妻賢母」思想の表裏〉前掲『近代日本文化論 8 女の文化』26頁参照。
6　北村透谷「厭世詩家と女性」初出は、1892年2月6日『女学雑誌』303号 及び 同年同月20日 同 305号。引用は『透谷全集 第二巻』、岩波書店、1950年7月。
7　同上 254頁。
8　北村透谷〈「伽羅枕」および「新葉末集」〉初出は、1892年3月12日『女学雑誌』第308号 及び 同月19日 同 第309号。引用は 前掲 『透谷全集 第二巻』。
9　同上 277頁。
10　北村透谷「處女の純潔を論ず」初出は、1892年10月8日『白表・女学雑誌』第329号。野辺地清江の「女性解放思想の源流—巌本善治と『女学雑誌』」(校倉書房、1984年10月 86頁)によれば、『女学雑誌』は第320号(1892年6月4日)から1893年3月まで『白表女学雑誌』・『赤表女学雑誌』の分離発行となっている。以下、巌本善治については、度々、野辺地清江の「女性解放思想の源流—巌本善治と『女学雑誌』」を参考にする。北原白秋の引用は、前掲 『透谷全集 第二巻』25頁。
11　前掲「厭世詩家と女性」256頁。
12　前掲「厭世詩家と女性」257頁。
13　佐伯順子は、「心中の近代」(『近代日本文化論 2 愛と苦難』、岩波書店、1999年12月)35頁で、「キリスト教的霊肉分離論に影響を受けた明治の“プラトニック・ラブ至上主義”」と述べている。
14　前掲『親密性の変容』62頁。
15　張競『近代中国と「恋愛」の発見』67頁 岩波書店 1995年6月。
16　前掲 野辺地清江 143頁。
17　巌本善治「女学の解」山口美代子編集『論争シリーズ 資料 明治啓蒙期の婦人問題論争の周

辺』 170頁、ドメス出版、1989年1月。

18　前掲　野辺地清江　124頁。

19　前掲　野辺地清江　86頁。

20　以下中略を　…　にて示す。

21　巌本善治「婦人の地位　下」28頁、『女学雑誌』第5号　1885年9月25日発行。

22　同上　38頁。

23　前掲　野辺地清江　154頁。

24　引用は、前掲　野辺地清江　224頁の青柳有美による訳詩による。野辺地清江によると、『女学雑誌』172号は、巌本善治とかし子の結婚後の編集による最初の雑誌であるから、「花嫁のベール」という英詩は、結婚後第1日の日記に記したかし子の詩ということになると述べている。

25　平塚らいてう「世の婦人達に」『平塚らいてう評論集』26頁、岩波書店、 1987年5月。

26　平塚らいてう『青鞜』第1巻第1号　50頁、 青鞜社　1911年10月1日発行。

27　折井美耶子編集『論争シリーズ　5　資料　性と愛をめぐる論争』13頁、ドメス出版　1991年10月。初出は『反響』1914年9月号。

28　同上　20頁。初出は『青鞜』第4巻11号、1914年12月。

29　同上　37頁。

30　同上　38頁。

31　同上　19頁。

32　同上　71頁。初出は『新公論』1915年3月号。

33　同上129頁。初出は『婦人公論』第一巻10号、1916年10月。

34　前掲『平塚らいてう評論集』31頁。

35　前掲『論争シリーズ　5　資料　性と愛をめぐる論争』266頁。

36　同上　196頁。初出は『日本評論』第3巻9号、1917年9月。

37　前掲『平塚らいてう評論集』163頁。初出は『女性同盟』創刊号、1920年10月。

38　前掲『論争シリーズ　5　資料　性と愛をめぐる論争』94頁。初出は『婦女新聞』第783号、1915年5月21日。

39　同上　116頁。初出は『第三帝国』第44号、45号、46号、1915年6月25日・7月5日、15日。

40　同上　119頁。初出は『婦人新報』1915年10月号。

41　与謝野晶子「女子の徹底した独立〈紫影録(抄)〉」香内信子編集『論争シリーズ　1　資料　母性保護論争』85頁、ドメス出版、 1984年10月。

42　同上　166頁。

43　同上　111頁。

44　同上　175頁。初出は『文化運動』第100号、1918年10・11月合併号。

45　前掲　野辺地清江　62頁　及び　84頁　参照。野辺地清江は、明治の初年、巌本善が唱えた西欧的・自由主義的良妻賢母思想を、国家主義的・封建的良妻賢母思想と区別して、とくに「前期良妻賢母思想」と表現した。